

ドラえもんの主要登場人物たちの野球の実力についての考察

教育学部一回生 岡村優太郎

1 はじめに

ドラえもんの作中では、のび太たちが野球をしているシーンがよく見受けられる。中にはサッカーやバレーといった別のスポーツに興じているシーンもあるが、やはり一番登場回数が多いスポーツは野球であろう。

そこで私は原作を調べ上げ、ドラえもんの主要登場人物たちの野球の実力について考察した。今回はこの場を借りて、このことについて述べていきたいと思う。

2 のび太通算成績およびそれについての考察

全登場人物の中で、野球シーンの描写が一番多いのがのび太である。そこで、のび太の野球シーンを調べ、通算成績を算出してみた（調査対象は藤子・F・不二雄大全集『ドラえもん』の全20巻）。まずは打撃成績からみていこう。

表 1

打率	打席数	打数	安打	本塁打	三振	四死球	OPS
.652	26	23	15	11	7	3	2.779

※ヒットを打ったことは明らかだが何塁打かわからないものはすべて単打として算出

この数字だけ見れば、のび太はとんでもない怪物打者である。例えば、3割を超えれば優秀とされる打率は6割を軽く超えており、9割を超えれば強打者とされるOPSに至っては約27割をマークしている。1シーズンでの打率の世界記録は.426で、OPSの世界記録は1.422であることを考えても、のび太の成績がいかに異次元であるかが見て取れる。（この世界記録はメジャーリーグで記録されたものである。小学生の草野球の記録とメジャーリーグの記録を比較するのはいささかナンセンスかもしれないが、のび太の成績の突出度を分かりやすく表現するために比較させてもらった）

さて、これだけ見ればのび太はとんでもない怪物打者であるわけだが、ここで一つ疑問が生じる。それはこの成績がのび太自身の実力を反映したものと言えるのかどうかという点である。のび太がひみつ道具を使って活躍しているシーンは多いため、のび太の本来の実力が上記のデータに反映されているとは言い難いだろう。そこで上記のデータから、のび太がひみつ道具の力を借りて残した成績を除外した成績、つまり

のび太自身の実力で残した成績を調べた。その結果がこれである。

表 2

打率	打席数	打数	安打	本塁打	三振	四死球	OPS
.222	12	9	2	2	7	3	1.305

これを見ると、打率こそ低い**OPS**は優秀な数字をたたき出しているといえる。それもそのはず、のび太が自力で放った2本の安打はすべて本塁打であるからだ。そして注目すべきは、のび太の打席結果が三振、本塁打、四死球しかない有名な**アダム・ダン**選手を想起せざるを得ない。まさに「当たれば飛ぶ」タイプの選手だといえる。ちなみにこの2本の本塁打、のび太は右打席、左打席で1本ずつ打っている。（左打席での本塁打は石ころぼうしを着用しての本塁打であったが、本塁打を打つという行為自体はの



図 1 のび太が自力で打ったホームラン。枠線を突き破る会心の当たり。（『アクト・コーダー』より）

び太が自力で成し遂げたためこちらの成績に加えた) ひょっとしたらのび太にはスイッチヒッターになれる可能性があるかもしれない。

そしてもう一つ、のび太の本来の実力を考えていくうえで無視することができないことがある。それは『空ぶりは巻きもどして…』において、のび太の打率が一分であることが明らかになったことである。このデータも考慮に入れる必要がありそうだ。作中においてあまりのび太が野球の試合に参加することに積極的でないことが多いのを考えて、打率一分を100打数1安打（この1安打は単打として計算）としてこれを表1、表2のデータに加算してみると、表1は打率が.130、OPSが.549、表2は打率が.027、OPSが.136まで落ちる。この数字ははっきり言ってかなり低い。なんだか一気にのび太らしい成績になってしまった。

以上のことを踏まえて総括すると、当たり前かもしれないがのび太は道具を使えば強打者である。ただ、道具がなくても「当たれば飛ぶ」ロマンのある選手であるといえよう。スイッチヒッターへの転向も視野に入れ、バッティングの確実性が増せば期待が持てなくもないだろう。

打撃成績に関する講評は以上にして、ここからはのび太の投手、守備成績を見ていこうと思う。

表 3

守備機会	失策	守備率	投球回	失点	失点率
12	5	.583	2	90	405.0

はっきり言ってこの数字は惨憺たるものである。守備率とは大雑把に言えば、エラーをせずに守備ができる確率である。ポジションにもよるが、たいていは最低でも 9 割後半ではないと守備に難ありとの評価が下されてしまうこの指標において、のび太は 5 割台というある意味異次元の成績を残している。ちなみに、道具なしの状態では守備率は 0 割である。続いて失点率について。失点率とは、仮に投手が 9 回を投げ切った場合、平均で何失点するかを表したものである。のび太の 405.0 という成績は、すなわちのび太が 9 回を投げ切った場合、平均して 405 点取られるということを表している。野球で 405 点取られるというのはあまりにも非現実的である。(参考までに、日本プロ野球全体での各シーズンの失点率は大体 3~4 点台である) では、いかにしてこのような成績をたたき出してしまったのだろうか。のび太の投球シーンを少し詳しく見ていきたい。



図 2 1回 77失点する回でののび太の投球。アウトを取れる気がしない。(『あの道この道楽な道』より)

のび太の投球シーンは原作に 2 回出てくる。1 回は『ジャイアンズをぶっとばせ』にて女子チームのエースとしてののび太が登板しているシーンである。この話では守りにつく女子たちが守備を放棄してしまったため 1 イニング投げて 13 失点の滅多打ちにあった。しかしこれはのび太以外にまともに守ってくれる選手がいなかったために起こったことであり、仕方ないことと言われれば仕方ないことである。そしてもう 1 回は『あの道この道楽な道』でジャイアンとのび太の立場を逆転させて、のび太が登板しているシーンである。この話ではのび太はまともにストライクを投げられず、1 回 77 失点という歴史的な大炎上をしてしまっている。これはさすがに擁護できない。完全な独り相撲である。

これらを考慮すると、のび太の守備、および投球は壊滅的であることが分かる。投手としてはもうあきらめたほうがいだろう。そして、試合で起用されるためには打撃よりも守備をなんとかするべきであろう。もしくは、指名打者で出場するか…いや、おそらく小学生の草野球では指名打者制はとっていない。打撃はまだ魅力があるだけに、守備を早急に改善することがのび太に課せられた大きな課題であろう。

3 ジャイアンの通算成績およびそれについての考察

ジャイアンは、言わずと知れたジャイアンズのエースであり監督である。(最初期の話『アリガターヤ』ではピッチャーではなくキャッチャーをしていたが…) そんな彼の通算成績は以下のとおりである。

表 4

勝	敗	投球回	失点	失点率	被本塁打
13	18	22	36	14.73	5

※基本的にジャイアンズの試合はジャイアンが完投していると考えているため、ジャイアンズの勝敗がほぼ投手ジャイアンの勝敗数に対応しているとして算出した。ただ、『高層マンション脱出大作戦』においてはジャイアンが試合に出場していないためジャイアンの勝敗数からは除外した。(ちなみにその試合には勝っている)

※試合の勝敗が明確に示されていない場合でも、話の流れで勝敗が予想できる場合は勝敗数に加えた。

※投球回と失点ははっきりと描写されているもののみ集計した。そのため投球回と勝敗数がかみ合っていないがそここのところをご容赦願いたい。

この数字だけ見れば、ジャイアンはあまりいい投手とは言えない。勝ち星こそそこそこあげているが、失点率は二桁にのってしまっている。だが、それは彼一人の責任と言えるだろうか。前述したように、のび太の守備率は壊滅的である。他のメンバーも、のび太ほどではないにしろエラーをすることは多だろう。そう考えると、ジャイアンの「自責点」は失点よりも大幅に少ない可能性がある。(エラーがらみの失点は自責点には含まれない) それに加え、ジャイアンズは空き地で試合をすることがある。空き地は野球の試合をするには狭すぎるように感じる。普通の球場なら外野フライになる当たりは全てホームランになってしまうのではないだろうか。

そう考えると、バックのザル守備、球場の異常な狭さの中、失点率を 14 点台に抑え、

13 勝もしているのはある程度優秀であると評価できると私は思う。もっとも、失点率の高さはバックの守備に必要以上のプレッシャーをかけていることも原因の一つかもしれないが…。あともう一つ考慮しなければならないのは、「魔界大冒険」にてジャイアンが大魔王デマオンの心臓を銀の矢で見事打ち抜いたことだ。すさまじいものであったらうプレッシャーをものともしないこの精神



図 3 味方守備陣に脅しをかけるジャイアン。失点が多いのはこれも一因か？(『ドンブラ粉』より)

力、土壇場でも狂うことのなかったコントロールこそが、ジャイアンはむしろ優れた投手であるということを裏付けている。(ちなみにリメイク版の「新魔界大冒険」ではこのシーンはジャイアンではなくのび太が担当している。私としては、この采配には疑問を抱かざるを得ない。どう考えてもこの重要な場面を失点率 405.0 のノーコンピッチャーに任せるのはおかしいだろう…)

それでは次に打撃成績を見てみよう。

表 5

打率	打席数	打数	安打	本塁打	三振	四死球	OPS
.833	6	6	5	1	1	0	2.167

この少ない打数で評価を下すのはあまりよろしくないが、それでもジャイアンは優秀な打者といっているのではないだろうか。イメージとは裏腹に案外本塁打が少ないものの、打率は驚異的である。投手、そして監督でありながらこれほどの打撃成績をあげられるのは素晴らしい。

以上のことを考慮してまとめると、ジャイアンには日本ハムの大谷選手のように二刀流、すなわち野手、投手を兼任できる素質がありそうだ。主要登場人物の中ではやはりジャイアンの実力が突出していると考えていいだろう。

4 その他主要登場人物たちについての考察

残念ながら他の主要登場人物たちは、成績を出せるほどの野球シーンの描写がなかった。そのため、成績の算出は抜きにして、私の考察のみを記していきたい。

(1) スネ夫

主なポジションは捕手だが、投手を含めた他のポジションも守っているシーンがある。(ちなみにスネ夫が投手を務めていたのは、ジャイアンが捕手をしていた『アリガターヤ』の回である) また、描写される野球シーンこそ少ないものの、打撃では2打数1安打と結果を残している。(安打とならなかった打席も、ひみつ道具を使ったのび太の妨害があったために凡打となっているため、実質2打数2安打である。) 原作を見る限りでは、守備で特別足を引っ張る描写もなく、どのポジションも守れ、打撃でも結

果を残せる器用なユーティリティープレイヤーであるという印象があるが、『Yロウ作戦』の回では、Yロウによってレギュラーとなったのび太と入れ替わる形でスネ夫がスタメン落ちしてしまっている。また、『まねコン』の回では町内十周マラソンでジャイアンズのチーム中最下位になってしまっている(のび太は道具の力で最下位を回避した)。考えれば考えるほど、スネ夫という選手の評価は難しい。ただ、捕手というポジションは彼が適任であると思う。性格が悪くないと大成しないと言われる捕手というポジションは、嫌がらせの才能に優れ、かつ頭も悪くないスネ夫にとっては天職であろう。非常に嫌らしい配球で対戦相手を翻弄することができそう。ただ、投手であるジャイアンがスネ夫のリードに従うかどうかは疑わしいところだが…



図 4 貴重なスネ夫の投球シーン。捕手はジャイアンだったが道具の力でのび太に交代した。(『アリガターヤ』より)

(2) しずか

しずかが野球をプレーするシーンは3回しか出てこない。『ジャイアンズをぶっとばせ』では具体的な結果を見ることはできなかったが、残りの2回においてしずかは活躍している。

『大氷山の小さな家』の回では、ジャイアンから見事にヒットを放っている。『男女入れかえ物語』の回に至っては、守備でのファインプレーに加え逆転サヨナラホームランも放ってしまう。(この回はのび太としずかの体が入れ替わっているため、体はのび太であるのだが) 普段野球をしていないにもかかわらずこのような活躍ができるということは、しずかに野球センスが備わっている証拠である。是非とも女子野球界に革命を起こしてもらいたい。



図5 外見はのび太だが中身はしずか。このあたりは逆転サヨナラホームランとなる。(『男女入れかえ物語』より)

(3) ドラえもん

ドラえもんが原作の野球シーンにおいて何らかの結果を残している描写はない。ただ、野球をしている描写はいくつかあるので紹介しよう。まずは図6の『タンポポ空を行く』での最後のコマ。ドラえもんが珍しくバッテリーボックスに立っている。注目すべきはドラえもんの構え。この構えはまさしくあの落合博満氏の神主打法を彷彿とさせる。さすがはドラえもん、バッティングフォームも一流である。今度は図7の『どくさい



図6 ドラえもんのバッティングフォーム。(『タンポポ空を行く』より)

スイッチ』における最後のコマを見てみよう。そこではドラえもんは、今となってはあまり目にすることが少なくなってしまった見事なウィンドアップモーションを披露してくれている。最後に『Yロウ作戦』での一コマ。この回でドラえもんはのび太の野球のコーチをしているのだが、「もっと走れ、へたくそ!」「それじゃアウトだよ、

のろま!」「しかし、きみのへたくそは、なみたいいのへたくそじゃないよ」などの容赦ない暴言がドラえもんの口から飛び出す。結局のび太が怒ってドラえもんはコーチをやめてしまった。あまりコーチをするのには向いていないようだ。

さて、ドラえもんの原作ではドラえもんが野球シーンにおいて何らかの結果を残している描写はないのだが、『ドラベース』の第一話ではドラえもんが投手として試合に出場している。だが、この試合は21-0で大敗を喫し、以降『ドラベース』においてドラえもんが試合に登場することはなかった（のび太の面倒を見るのに忙しいため）。



図 7 ドラえもんのピッチングフォーム。
ドラえもんの腕はよく伸びるのだ。（『どくさいスイッチ』より）

5 おわりに

ここまで長々と書き連ねてきたが、結局何が言いたいかというと私はドラえもと野球が大好きだということである。長ったらしい駄文を最後まで読んでくださった方々に感謝の意を表して、私の投稿を締めくくらせていただきたい。